
あんた、忍者になりなさい

永祇丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あんた、忍者になりなさい

【Nコード】

N5943Z

【作者名】

永祇丸

【あらすじ】

時は戦国。とある地方を領する竹満家に足軽として仕える惣太は、明日の合戦上を前に臨んで及び腰。彼にとっては初めての戦であり、明日の命のことを考えれば夜も眠れない。そんな惣太の目の前に、一人の忍びの少女が現れて……

第1章 北白矢川陣中異聞（一）

夜の闇に塗り込められ、山野は黒く沈んでいる。

その先にあるであろう川を挟んだ向こう側、低く連なる山々の一部分のみが、赤々と燃える篝火によって彩られていた。

不規則に並ぶ灯りの元には数千の人馬が集っていることだろう。

今ごろは刀槍の刃を研いでいることだろう。

ここから見えるわけではないが、見なくともそれが分かる。

そして、この夜が明けて明日になったら、自分があそこにいる総数二千の軍勢と戦うことになることも、惣太は嫌になるくらいに分かっていた。

「はぁ……」

思わずため息が出る。

遠く広がる敵陣の威容を眺めながら、彼は自分の身体の内側が冷え冷えとしてくるのを感じていた。その寒気は、決して夜の寒さによるものではないだろう。

明日行われるであろう戦は、惣太にとって初めて経験する戦だ。いわゆる初陣というもののだが、哀しいことに惣太の身分は単なる足輕に過ぎない。

高い身分の武士の子だったら、立派な鎧と多くの家来に囲まれた華々しい初陣を飾れるのだろうが、ただ一人の足輕のためにそんな趣向を凝らしてもらえるはずもない。他の足輕と一緒に槍を構えて敵陣へ突き込んで行くだけだ。

しかも、困ったことに今回の戦はかなりの激戦になるだろうと聞いている。

川の向こうに陣取っているのは、そちら側に領地を持つ有若家の軍勢で、こちら側に陣を敷いているのは惣太の属している竹満家の軍勢である。

この両家は前々から非常に仲が悪かった。お互いを攻めたり攻められたり、領地を取ったり取り返したりを何代にも渡って繰り返してきた家系であった。

今や中央にある大きな権力が衰退し、地方にある小さな権力がそれぞれ我意を張るようになってきた戦国の世である。

竹満家と有若家のような関係は、全国津々浦々を見渡してみると珍しくも何ともない。

しかし、惣太はそんな大きな視点は持っていない。むしろ、惣太の小さな視点から眺めると、いつまでもいつまでも争いを続ける両家の間柄はやはり異常に見える。

互いに相争うこの関係は、惣太の生まれるずっとずっと前から続いているそうなのだ。今となっては、争いの原因がどこにあったのか、誰も覚えてないんじゃないだろうか。

まったく、どこかで誰かが仲直りをしようと言いだしたりはしなかったのか。

そんなことを惣太は思うが、誰も言い出さなかったのだろう。偉い人には面子だ意地だと色々な事情があるものだ。

しかし、つい先日その状態にも変化が現れた。

発端は竹満家の当主であった竹満延頼が隠居して、家督を長男の頼忠に譲ったことにある。若い当主の頼忠はすぐさま家臣団を掻き集め、なんと有若家を討滅するための一大軍勢を組織したのである。その報せはたちまち有若家のほうへも伝わり、同じように動員できるかぎりの兵を集めて繰り出した。

かくして、お互いに全力を投入した軍勢同士がお互いの領地を目指して進軍して、そして領地の境界にあたるこの場所でぶつかり合うことになってしまった。

惣太の思いとは真逆の方向へと両家の関係は動いたのである。

今まで溜まりに溜まった恨みをここで晴らせると思っているのだ

ろっ。

殿様を始めとして竹満家の家臣たちは、有若家の者を一人残らず冥途に送ってやると息巻いているようだし、向こうは向こうでこの機会に竹満頼忠の首を取ってやると士卒の端々に至るまで叫んでいるそう。

それだけ互いに士気が高ければ、どちらが勝っても負けても相当な死人が出ることだろう。

目の前に流れている川の名前は北白矢川と呼ばれているが、明日になったら血の色で真っ赤に染まって北赤矢川と呼ばれるようになっていくんじゃないだろうか。

「よいか、明日は死ぬつもりで敵陣に飛び込んで行け。御家の存亡を賭けたこの戦で大将首のひとつでも取ったあかつきには、たんまり恩賞がもらえるぞ。めざましい働きを示せば、士分にも取り立てられよう」

昨日、惣太が属している組の足軽組頭はそんなことを嬉しげに語っていた。正直なところ迷惑な話である。

惣太には、敵の大将の首を取って出世しようなどという欲はない。また、それほど腕力に自信もない。死ぬつもりで敵陣に飛び込んで行ったところで、本当に死んでしまうのがオチのような気がしてならないのである。

（戦が始まる前に逃げてしまおうかな）

そんなことを思わないでもないのだが、もう今さら遅かった。竹満家の軍勢が充滿しているこの山からは、たとえ味方の者であっても簡単に抜け出すことはできないだろう。

用もないのにウロウロしているところを見つみると、怪しいヤツが歩いていると思われる。

誰も彼もが戦を前にして鼻息を荒くしているので、言いわけをしても聞いてもらえないだろう。何かを言うより前に、即刻その場で

首を飛ばされかねないのである。

さてさて、それでは惣太はここで一人で何をしているのだろうか。ここは足軽たちが待機している陣地ではない。陣地から少し離れて通る大小の山道から、さらに少し離れた場所に見つけた小さな草原であった。

向こう側の山と同様、こちらの山でもあちらこちらに陣が作られ篝火が焚かれているのだが、その光もこの場所には届かない。ここには月と星の光があるだけである。兎か熊か、はたまたこちらの陣地の様子を探りに来た忍者にでも出会いそうな場所であった。

別に、たいした用事があってここにいるわけではない。

明日に備えて寝ようと思っても眠れない。少し夜の風にでも当たってみようかと思つて、足軽たちの溜まり場を抜け出し、ぶらりと歩いて辿り着いたのがこの場所だったのだ。

向こうを見れば、敵陣の灯りが見える。だからぼんやり眺めてみている。

しかし、眺めたところで明日の戦がなくなるわけでもなし。かえつて不安になつてしまつたくらいだ。

（こんな場所に来るんじゃないかった）

今では、後悔すらしている。

「はぁ……」

と、またもやため息をひとつ。

そろそろ戻ろうかな。あまり長く外に出ていることがバレてしまつと、後で組頭に怒られる。そう思つて、惣太は遠く離れた敵陣に背を向けた。

「ん？」

背を向けて、歩き出そうとした時だった。

すぐ目の前にある草むらから、ひとつの影がひょっこり飛び出している。その姿が、惣太の両の眼に映り込んでいた。

兎にしては大きすぎるし、熊にしては華奢である。ひよつとして

……

（忍者？）

その輪郭も背丈も間違いなく人間のもので、背の低い草むらの上に上半身だけが姿を見せている。人影は暗い夜に溶け込むような黒っぽい装束に身を包み、同じ色の布で覆面をしていた。

一目見ただけでそうと分かる、いかにも格好の忍者だった。

「……………」

覆面の間からのぞく二つの眼と、惣太の視線がしばし絡み合う。

こんな時にどうすればいいのか、あまりにも唐突に遭遇したものだから、頭が上手に回らない。その場から一步も動かず、ただ突っ立っていることしかできなかった。

「……………」

一方、相手も相手である。何かを言うでもなく、どこかに逃げようとすることもなく、ただ真っ直ぐ前を見ているだけで惣太から視線を外さない。

ひよつとしたら、この遭遇は向こうにとっても突然のことだったのだろうか。

「ええつと……………」

やがて最初に口を開いたのは、黒装束の忍者のほうだった。

「こんばんは」

どこか呑気な声でそういいながら、カクンと頭を下げてお辞儀をする。

「あ、こんばんは」

つられて惣太もお辞儀した。こちらはより丁寧に、腰を折って頭を下げた。

「今夜は、いい月夜ですね」

「そ、そうですね」

「風も気持ちいいし」

「はい、そうですね」

「お散歩ですか？」

「ええ、まあ」

（あれ？ こんなこと喋ってる場合じゃないような……）

頭の片隅でそんなことを思わないでもないのだが、まるで世間話をするようにして話を振られ、ついつい答えてしまふ惣太である。

「でも、ちよつと冷えてきましたね」

「そうですか？」

「まだ夜の冷え込みが残ってる季節だから。あんまり長く外にいると、風邪ひいちゃいますよ」

「まあ、そうですね。気をつけます」

しかも、ちよつと驚いたことに目の前にいる忍者は女性のようなのである。おまけに若い。

声を聞いているうちにそうに違いなと思ったのだが、なんとなく気を抜いてしまうのは、そのせいもあるのだろうか。

「じゃあ私はこれで。さようなら」

やがて、女忍者は手を上げて、別れの挨拶を送ってきた。立ち上がり、そしてこの場を去ろうと向こうを向いた。

「あ、はい。さようなら」

惣太も手を振って見送りの体勢をとる。

「元気でね」

それだけ言い残し、女忍者は去っていく。

しかし、ここにきてようやく惣太は正氣に戻った。

このまま放っておくのは、実はマズいんじゃないだろうか。今ごろになって気がついた。

「ちよ、ちよつと待った！」

一歩踏み出し手を伸ばす。幸いなことに、惣太の手は女忍者の腕まで届いた。その細い腕をがっちり握って、そして引っ張る。

「いたっ！ ちよつと、なにをするのよ！」

振り返り、女忍者は惣太を睨んだ。

「あああ、ごめんなさい。いや、そうじゃなくて……」

覆面の間から見える眼がきつく吊り上がっており、その視線と声に惣太は怯む。しかし、いちおう手だけは放さなかった。

相手が逃げないように、握った手に力を込める。

大丈夫。相手は女じゃないか。

「ええつと、お前は誰だ！ こんなところで何をやってる！」

とりあえず、相手の正体を確かめておこう。

詰問するために、惣太はせいぜい頑張って厳しい声を出してみる。もつとも、自分で聞いていてもあまり怖くはなさそうだったが。

言い慣れていない台詞を言ったおかげで、声が見事に裏返っている。言われたほうの女忍者もあまり怖がってはいないようだ。怖がる代わりに困ったように首をかしげて、少し何かを考えるような様子を見せた。

若干の間が空いたと思ったら、

「私？ 私はその……ただの通りすがりの村娘よ」

先ほど惣太と世間話をしていた時同様、何気ない声の調子でそう答えた。

「はあ、そうなんですか」

とは言わない。今度は惣太も釣り込まれない。

目の前にいる人物は、顔をやや斜め上に向けたまま惣太と目を合わせようとしないようだ。いかにも嘘をついている。いかにも怪しい。

「こんなところに村娘がいるわけないでしょう」

まだ本番は始まっていないとはいえ、ここは戦場である。この周辺にある村の住人は、あらかた避難してしまっている。

「ええつと、実はね、昨日の昼頃からそっちの木陰でお昼寝してたんだけどね、なんだか気がついたら山のあっちこっちに陣地ができてたのよ。ひょっとして戦でも始まるのかと思ってたら、まさにその通りだったわけで、それで山を降りるにも降りられなくなっちゃって」

「じゃあその服と覆面は？」

ただの村娘が、こんな忍者のような格好をしているわけがない。

「あれ、知らないの？ この格好って、若い子たちの間で流行ってるのよ」

「そんな話、聞いたこともない。それから、その足元に落ちてるのは？」

惣太が指さす地面の上には、鉄でできた小さなものが落ちていた。四方が尖った薄い鉄の板のようなもので、つまるところは手裏剣だ。それを見て、女忍者はぎょっとした。そして、覆面の上からでも分かるほどに狼狽した。

「あんた、こんな暗いなかで、こんな小さい物によく気付けたわね」
気付いた当の本人もそう思う。

惣太は意外と目が良く、また俯き加減になることの多い性格なので、地面に落ちている物によく気が付くのだ。

あまり自慢にならない特技だが、妙なところで役立った。

「とりあえず、それって手裏剣だろ？」

「こ、これは、さっき歩いてる時に拾ったのよ。きつとどこかの忍者がこの山に潜入していて、竹満軍の秘密をあれこれ探ってるのに違いないわ。ほらほら、こんなところで遊んでないで、その曲者を探しに行ったほうがいいんじゃないの？」

「いや、だから……」

もつとも怪しい曲者が何を言うのかと呆れつつ、そろそろ惣太もこの会話に疲れてきた。

「ここでこんな話をしてても仕方なさそうだなあ」

「そう？　じゃあ、もつと別の話でもしましょうか。あんたはご飯の上からお味噌汁をかける派？　それとも、お味噌汁の中にご飯をぶっこむ派？」

「いや、そうじゃなくて」

そんな行儀の悪い話をしたいわけじゃない。

まあ、ある大名がご飯の上に汁を二回に分けてかけており、その様子を見た大名の父親が「飯にかける汁の量も分からのか」と嘆

息したというエピソードが四百年先にも伝えられていたりする。この時代において、汁かけご飯は行儀が悪い食べ方でもなかったのだろう。

ちなみに、惣太は汁椀の中に米の飯を放り込む食べ方のほうが好きである。

とりあえず、以上は余談。

「今から組頭のところに来てもらって、話はそこで聞かせてくれな
いかな？ 大人しくしていてくれたら、乱暴なことはしないから」
「そんなこと言っちゃって、私をどこか人目につかないところに連
れて行って、そこで大きな声では言えない乱暴なことをするつもり
なんじゃないの？ ああ、イヤらしい」

「いや、しないから」

惣太は女忍者の手を引つ張って、陣地のあるほうへと歩いて行こ
うとする。

こうなったら問答無用だ。力づくの一手に出よう。
ところが、女忍者は立っているその場所から動いてはくれなかつ
た。

「ほら、早く」

歩くように促す惣太の言葉には答えを返さず、その代わりに女忍
者はふいに惣太に身を寄せてきた。そして、彼の口元を手で押さえ
た。

「むごっ！？」

驚いて目を丸くする惣太の耳元に顔を近づけてきたかと思うと、
女忍者はその耳に向けて素早くこう囁いた。

「隠れなさい」

問い質す暇もない。今度は頭を押さえられ、そして強引に屈まさ
れてしまった。

「いい？ 喋っちゃダメよ」

惣太の隣に同じように屈み込み、女忍者は口の前に人差し指を立
てて見せる。

わけが分からなかったが、ついつい惣太は頷いてしまった。彼女の目の中に、先ほどとは違う真剣な色が宿っているのを見たからだ。そして、言われたとおりに口元を固く引き結ぶ。ちなみに、最初に惣太の口を押さえた女忍者の手は、すでに放されている。

ザッザッザッと、少し離れた場所から草を踏む音が聞こえ始めた。カチカチと具足の擦れる音もする。数人の話し声も一緒に聞こえてくるし、どうやらどこかの組が軍陣の見回りをしているらしい。

それらの音は、ゆっくりとこちらに近づいてくるようである。

「明日の戦はどうなるんだろうなあ」

「さあなあ、まあ勝つても負けてもしばらく戦は起こらないんじゃないか。もうすぐ田植えの時期だからな」

「そういえばお前さ、もうすぐ嫁を貰うって言ってたよな」

「ああ、幼馴染でさ、子供の頃から夫婦になろうって言い合ってたんだ」

「そりゃあ羨ましい話だな」

「この戦が終わったら、村に帰って祝言を挙げることにしてるんだよ」

そんな会話を交わしつつ、槍を持った足軽二人が通り過ぎていく。話に夢中で周囲に気は配っていなかったのか、息をひそめながら草むらの影に隠れていた惣太たちには、まったく気付かなかったようである。

相変わらず雑談に興じつつ、やがて来た方向とは逆の向きへと行ってしまうた。

「ねえねえ、今の話聞いてた？ 戦が終わったら祝言を挙げるって、そういうこと言ってる人はだいたい死んじゃうのよね。知らないのかな？」

惣太の隣の女忍者がそんなことを言っている。

隠れると言った時の緊張感はどこへやら、最初に聞いた時と同じ

ような緊張感の感じられない能天気な声である。しかし、それに返す惣太の声は苦々しげだった。

「あの、なんで僕まで隠れなきゃいけなかったのかな」

惣太はこの怪しい女忍者を捕まえて、陣屋のある場所まで連れて行こうとしていたのだ。見廻りに来た兵たちに声をかけて、連れて行くのを手伝ってもらってもよかつたくらいだし、ましてや隠れる必要なんてあるはずなかった。

「なに言ってるの？ あんた、隠れてなきゃヤバかつたわよ」

「え？」

女忍者は自分の被っている覆面におもむろに手をかけると、その布をはぎ取った。

惣太の目の前に、女忍者の素顔が現れる。

暗いおかげで細かい目鼻立ちまでは分からないが、声から想像していたとおり若い。十五歳の惣太とそんなに変わらない、幼さを残した面貌がそこに現れた。

しかし、ここでわざわざ素顔を見せる意図が分からない。

「こんな草むらの影で、男と女が手を繋ぎながら二人っきり。そんなところを見かけたら、人はなんて思うかしら。いかがわしいことをやってたんじゃないかと考えるのが普通じゃないの？」

「ええ？ まさか、そんな……」

いかがわしいこととは具体的にどんなことなのか、想像して惣太は赤くなる。いやいや、赤くなってる場合じゃない。

「そ、そんなことを考えたりするより、ここに曲者が侵入しているって考えるほうが自然のはずだよ」

戦場に若い娘がいるなんて不自然きわまりないし、さらにこの娘は実に分かりやすく忍者の格好をしているのだ。

「甘い甘い。戦場にいる男っていうのはね、鬱憤とか欲求とか色々溜まってるのよ。そんなところで私みたいな美少女を目にしたら、常識的な考え方なんて簡単に吹き飛んで獣になっちゃうわよ。吹き飛ばないのは、よっぽどの朴念仁かそれとも子供だけね」

自分で自分を美少女と言うとは呆れたものだ。

そして、今の言葉の中には、遠まわしに惣太を馬鹿にする文章も含まれていたような気がする。常識的な考えが吹き飛ばなかった自分は朴念仁なのだろうか。それとも子供なのだろうか。

そんな惣太には気にも留めずに、女忍者はさらに続ける。

「そして、もしあいつらが私の色香に狂って変なことを考えたとするとうなると思う？」

狂うほどの色香なんてあるのだろうか。

「誰かに報せに行くより先に、私を押し倒しちゃうかもね。そうなたたら、邪魔なあんたは遠ざけられるか、下手をすると殺されちゃうわよ」

「殺されるって、そんな大げさな」

しかし、絶対ないとは言えないのが戦国の世の恐ろしさである。

戦に勝った軍が負けた側の城や町に入り込み、兵士による略奪強姦が行われるなんてことは珍しくない。惣太もそれを知っている。

「じゃあ、もしも二人で歩いてたりしたら……」

「いつ、どこで、誰に見とがめられて、そして殺されても文句は言えなくなるわね」

「そんな……」

それこそ大袈裟だ。

しかし、今や惣太はそんなことを考える余裕を失っていた。

「僕はどうすれば……」

惣太は女忍者にすがるような目を向けた。いつの間にやら、立場は完全に逆転している。

「それはもちろん、私をここで見逃して、そして私を見たことは金輪際忘れてしまいなさい。誰にも私のことは言っちゃダメよ」

「分かった。誰にも言わない」

「それでよろしい。じゃあ、私は行くから。あんたも早く戻りなさいね」

「は、はい」

軽く手を振り、惣太に背を向けると女忍者は茂みの中へと駆け出して行った。

今度は惣太も後を追わない。女忍者の姿が闇の中に消えるまで、その背中を見送っているだけだった。

（なんだったんだろう、あの人は）

不意に現れ、気が付いたら去っていつてしまった。ひょっとしたら、狐か狸に化かされていたんじゃないかとさえ思える。

眉に唾を塗っているうちに、女忍者の姿は闇の向こうに消えてしまった。

第1章 北白矢川陣中異聞（二）

「……さてと」

それなりに時間が過ぎて、惣太の頭も切り替わってきた。

とりあえず、自分も戻らなければ。

妙な女忍者に会ったおかげで、ずいぶん時間が経ってしまった。戻ったら怒られそうだなと気を重くしながら、惣太は細い山道を歩き出した。

しかし、歩き出して程もない頃、惣太の頭が何かに当たって彼の歩みを止めてしまう。

陣屋に戻ると組頭に怒られる。大声で怒鳴られて、覚悟が足りないだの全体の士気に関わるだの似たようなことを繰り返し繰り返し説教されるのだと思うと、憂鬱で頭が重くなる。

そんな感じでうつむき加減に歩いていたので、前にあるものに気付かなかったのだ。

「ん？」

と、何にぶつかったのかと頭を上げる。そこにあった……いや、そこにいたのは人であった。

「うわっ！」

思わず声を発してしまい、そして一歩二歩と後ろへ下がる。

惣太の目の前に立っていたのは、彼の身長よりもはるかに大きな熊のような巨漢であった。岩の上に目鼻をつけたような厳つい顔が、じいっと惣太を見下ろしている。

片手に槍を携え、胴には具足を着けてはいるものの、その装備の簡便さを見ると身分は惣太と同じく足軽だろうか。

どうやら、さっきはこの男が胸に着けている具足にぶつかったらしい。

「なんだあ、お前は？」

ちよっと首をかしげながら、大男が惣太に尋ねる。

「あ、あ、えつと……」

いちおう答えようとするのだが、大きな身体に威圧されてしまつて上手く言葉が出てこない。

そうこうしていると、大男のすぐ横の草むらがガサガサと音を立てた。

「どっかの組の足軽だろ？　なんで一人でいるのかは知らねえけどな」

大男と似たような格好をした男が一人。腰ほどの高さに茂った草を掻き分け姿を現した。

もつとも、足軽の格好なんて誰でも似たようなものである。惣太の格好も、この二人と大差はない。目に見えて異なるところと言えば、二人と違って槍を持っていないところくらいだ。

「おい、こんなところで何をやってんだよ」

もう一人の男と違つて、草の向こうから現れた男はひょろりと細くて痩せている。それでも上背はそれなりにあるので、上から睨まれるとやっぱり惣太は萎縮する。

「あの、その……眠れなかったから、ちょっとそのへんを散歩でもしようかと思つて、だからここまで出てきて」

そして、妙な女忍者に出会つて、その相手をしていたら帰る時間が遅くなった。その女忍者はどこかに行つてしまった。もちろん、そんなことは間違つても口には出せない。

「ふうん、ただの散歩つてわけか」

細身の男は、もともと細かった目をさらに細くして惣太を睨む。

「本当か？」

「は、はい」

「いいや、嘘だね。お前、本当はここに潜り込んできた有若軍の間者なんだろ。このあたりの様子を探つてたんだよな」

ずいぶん堂々とした態度と口調で、細身の男はそのように断言をした。

「そ、そんなわけないじゃないですか。違いますよ」

もちろん惣太は否定する。

「違わねえよ。おい、重五郎。こいつを捕まえるぞ」

言い訳をしている余裕もない。細身の男はさつと手を伸ばして惣太の腕をつかみ、そして横にいる大柄な男にも手伝うように促した。
「あ？　なんでこいつを捕まえるんだ？」

しかし、重五郎と呼ばれた男はゆつくりと首を傾げるだけだった。
「お前、今までの話を聞いてなかったのかよ」

「おう、聞いてなかった」

「あのなあ、こいつを問者つてことにして捕まえてやろうとしてたんだよ。そうしたら、後で褒美がもらえるかもしれねえからな」

「ああ？　問者つて何だ？」

「そんなことも知らねえのかよ。敵の回し者で、こっちに忍び込んで色々探ってるヤツのことだよ」

「なに、こいつは敵なのか？」

惣太を指さし、重五郎がまたもや首を横に傾ける。

その問いに対し、ぶるんぶるんと惣太は首を横に振る。

「おい、孫六。違うみたいだぞ」

「この馬鹿！　問者が自分から問者つて言うわけねえだろうが」

「じゃあ、なんで孫六はこいつが問者だつて分かったんだ？」

「そ、それはだな……こんな時間にこんな場所に一人でいたんだ。そんな怪しいやつ、問者以外に考えられねえんだよ」

「たんなる散歩じゃねえのか？　俺も夜に眠れなかったら一人で散歩するぞ」

なんだかよく分からないが、大男の重五郎は惣太のことを擁護してくれているようにも見える。それに対して細身の孫六は、どうにか惣太を敵の問者ということにしたいらしい。口から唾を飛ばしながら色々説明している。

ひょっとしたら、今ならここから逃げられるのではないだろうか。二人向き合いながら喋り合っているので、惣太のことは見ていない。

最初に孫六につかまれた腕も、すでに放されてしまっている。

そつと惣太は後ろに下がる。

「逃げてんじゃねえよ！」

しかし甘かった。孫六に見つけられてしまった。

「とにかく重五郎、こいつを捕まえて組頭のところに連れてくぞ！」

怪しい奴を見つけたら、とにかく連れて来いって言われてただろ」

「言われてたか？」

「ああ、言われてたんだよ」

「そつか、じゃあ仕方ねえな」

困ったことに、重五郎も孫六の言っていることに納得してしまつたらしい。

そして、二人の視線が惣太に向けられる。

「この際だ。連れていく前にちよつと痛い目にあわせてやるうぜ」

「おう」

しかも、なにやら物騒なことを言い合っている。

逃げようとも思ったが、すでに間に合いそうにない。どっちの男が先に殴りかかって来たのか考えている暇もなく、惣太に向かって握り拳が飛んできた。

思わず惣太は目を閉じる。目の前に迫った痛みに耐えるべく、歯を食いしばった。

(……ん、あれ？)

それから一瞬の後、惣太は閉じた目を再び開く。殴られる前に身構えたものの、身体のどこにも痛みがないことに不審を覚えたのだ。ひよつとしたら、一発殴られただけで魂が身体の中から飛び出してしまったのか。今は身体の少し上にふわふわ浮かんでいるところで、じきに自分は極楽に旅立ってしまうのではないだろうか。

そんなことを考えなくてもなかったが、どうやらそうでもないらしい。

「う……」

小さな呻き声が聞こる。目を開けて最初に見えたのは、ゆらりと倒れ掛かってくる重五郎の巨体である。

惣太は慌てて横によけると、重五郎の身体が丸太を倒すようにして地面に転がった。そして、そのまま動かなくなってしまった。

「安心しなさい。死んじやいないわよ、多分」

何があつたのかさっぱり分らない。そんな惣太の目の前に、さらにわけの分らないことに新しい人影が立っていた。

その人影は惣太に背を向け、彼と同じように呆然としている孫六に相對している。闇の中に見えているのはむしろ小柄な体格で、夜に溶け込むような黒っぽい衣に身を包んでいた。

その立ち姿には、どこか見覚えがあるような気もするが、

（あ、さっきの……）

女忍者ではないだろうか。

「お、お前、誰だ？ 何者だ？」

やや上ずった声で孫六が問いかける。

「ふっ、名乗る者のほどでは……じゃなくて、名乗るほどの者ではないわ」

女忍者はゆくりと答える。

その右手には、短い脇差のような物が鞘ぐるみ握られている。惣太は見えていなかったが、彼女はこれで重五郎の頭を背後から殴りつけ、そして気絶させたのである。

闇の中、どこからともなく姿を現し、そしてほとんど同時に殴りつけたのだから、重五郎は誰かに殴られたことすら知らずに気を失ったのではないだろうか。

「また会ったわね。元気だった？」

後ろを向き、女忍者が惣太に声をかけてきた。

元気だったかと聞かれても、ついさつき別れたばかりである。そんなことを頭の片隅で思いはしたが、返答できるほどの余裕は惣太にはない。

「実はねえ、あなたに頼みたいことがあるのよ。だからこうやって戻って来たわけで……」

女忍者の口調や態度は、相変わらず世間話をしているような調子である。

その声を聞いていると、終始驚いたり戸惑ったりしている自分のほうが異常なんじゃないかと思えてしまう。

「お前、女か？　なんでこんなところに女がいるんだ、ここで何してるんだ？」

一方、向こう側からは孫六が当然の質問を投げかけていた。やっぱり、あんなふうには戸惑うほうが普通の反応なのだろう。

「その格好、ひょっとして忍者か？　だったらお前、曲者……」
「うるさい！」

突然現れた人影に動揺していた孫六だったが、相手の正体が徐々に分かるにつれて声が大きくなってきた。それが気に障ったのか、女忍者はふいに振り向き孫六を睨みつける。

「黙ってなさい！」

そして、ほとんど同時に足を振り上げ、孫六の右足と左足の付け根あたりを蹴り上げた。

「んごあつ！」

場所が場所だ。孫六の顔が大きく歪む。

男だったら死ぬまで見せたくない顔であろうし、そんな顔を見せられるのも気分のいいものではない。

惣太も顔をしかめて見ていると、やがて孫六の目から生氣が消えて、そして腰を折り曲げたまま地面の上に崩れてしまった。

意識は失っていないのか、ピクピクと震えている姿が痛々しい。

「さてと」

すぐ足元で悶絶している孫六のことを一瞥してから、女忍者が再び惣太のほうに目を向けた。

思わず腰を引いてしまう惣太だったが、いきなり蹴りが飛んでく

るようなことはなかった。いちおう、安心していいらしい。

「さつきも言っただけど、あなたに頼みたいことがあるのよ。私に手を貸してくれない？」

「手を貸す？」

「そう。まあ、そんなに難しいことじゃないわよ」

「そりゃあ、僕にできることなら……」

本音を言えば、これ以上この女忍者と関わり合いになりたくない。だが、下手に断ったら何をされるか分からない。気が進まないながらも、協力する姿勢を見せるしかなかった。

「ありがと。じゃあ、行きましょう」

そんな惣太の心中を知ってか知らずか、女忍者はさっそく彼の手を取り歩き出した。

「え？ 行くつて、どこへ？」

引つ張られながら惣太は尋ねる。

向かっている方向は、彼が帰らなければならない陣地とは逆の方向なのである。これ以上、遠いところへは行きたくなかった。

「行けば分かるわよ。あ、いや、分からないからあなたに来てもらうんだった。私ね、これから竹満頼忠のところに行かなきゃならないの」

「はあ、竹満頼忠…… って、ええっ!？」

教えられた名前をそのまま繰り返し、そこで惣太は驚いた。

竹満頼忠とは、彼が仕えている大名家の当主であり、このあたり一帯に陣地を張っている軍勢の総大将の名前ではないか。

「大きな声出さないでよ。誰かに聞こえるでしょ？」

大きな声も出したくなる。ただの足輕の惣太にとっては、雲の上の人物の名前が出たのである。

「それじゃあ、これから行く場所って……」

「とりあえず、竹満軍の本陣ってことになるわね。そこに行けば殿様にも会えるはずでしょ？ でもさ、この山のあっちこっちに竹満家の侍が陣地を作っちゃって、どこが本陣なのかよく分からなくな

「つちやったのよね。だから、あんたに殿様のいる本陣まで案内してもらおうってわけ」

「案内？ いや、無理無理！」

「惣太が必死で首を振る。もちろん、縦ではなく横にである。」

「なんで？ 場所、知らないの？」

「いや、いちおう知ってるけど」

「この山の麓、明日の予定戦場である川とその周辺を見渡せるような場所に本陣が構えられている。そんなことを聞かされていた記憶があった。」

「だが、この場合は知らないと言っただけでいい。場所を覚えておいたほうが良かったかもしれない。行こうと思っても足輕の惣太が気軽に近づけるような場所ではないし、不審者を同行しているとすれば尚更である。」

「場所さえ分かれば大丈夫ね。さっそく行きましょう」

「あの、場所を教えるだけってわけには……」

「それじゃ駄目よ。また迷ったら困るじゃない」

「自分はもっと困る……と、惣太は言いたい。」

「どうしても、僕も一緒に行かないとダメかな？ 早く陣屋に戻らないと、組頭たちも心配してるかもしれないし」

「実際には心配してないだろう。してるとしたら、むしろ怒っているだろう。」

「そうねえ、どうしても行きたくないっていうなら、別に来てくれなくてもいいかな」

「え、本当に？」

「嬉しそうに聞き返す惣太である。」

「そんな彼の様子をチラリと眺めて、女忍者はおもむろに懷に手を入れた。そして、ゆっくりと取り出されたのは短刀なのか脇差なのか、とにかく刃物である。これまたゆっくりとした動作で鞘から抜き放たれたその刃は、一瞬きらりと光を發した。」

「無理をしてまで私と一緒に来なくてもいいけど、陣屋にも帰れなくなるわよ」

今までの陽気な声とは打って変わって、冷酷とも言えるような静かな声で、女忍者がそう言った。それと同時に彼女の右手が持ち上げられる。短刀の切っ先が、惣太のほうに向けられた。

「私の目的を知ってしまった以上、あんたをこのまま帰すわけにはいかないの。悪いけど、その口を封じさせてもらうわね」

「なっ、ちよつと……」

当然ながら惣太は慌てる。

相手は年端もいかない少女であるが、丸腰の惣太が反抗して勝てるとは思えない。いや、たとえ素手同士だとしても、きつと重五郎や孫六と同じ末路をたどるだろう。

こうなってしまうては、もはや道はひとつしか残っていない。

「分かった。いや、分かりました」

無抵抗であることを示すため、両手を上げつつ惣太は言う。その顔には、濃い諦めの色が浮かんでいた。

「本陣まで一緒に行きます。いや、案内します、させてください」

「それでよろしい」

うんうんと頷いて、女忍者は短刀を鞘に納める。

「じゃあ、行きましようか」

「はい……」

軽やかな仕草で歩き出す女忍者の背中を見ながら、トボトボ後を追いかける惣太であった。

第1章 北白矢川陣中異聞（三）

月と星の灯りを受けて、草木の陰がぼんやりと浮かび上がっている。

「はあ……」

そんな闇の中、惣太は自分の前を進む草でも木でもないものの影を見ながらため息をついた。

これでもう本日何度目のため息だろうか。数えるのもバカバカしい。

「ねえねえ、竹満頼忠のいる本陣まで、あとどれくらいかかるの？」
そんな惣太の悲嘆とは裏腹に、前に行く人影が明るい口調で聞いてきた。あちらは足取りも軽くて惣太とは対照的である。

「さあ、よく分かりません」

その軽い人物が投げてよこした問いかけに、惣太が返した答えは頼りない。

竹満軍の本陣の場所について、惣太はいちおう知っているとは答えたが、明確に把握しているわけではない。

惣太の属する足軽組の組頭が話していた内容を、なんとなく記憶してただけであり、大まかな場所を知っているだけなのだ。実際にその場所に近付いたこともなければ、近づく用事があったわけでもない。

しかも、今は人目を避けるために山の中の道なき道を進んでいる。自分が今どこにいるのかさえ、正確には分かっていないのだった。

まあ、顔を上へと向けてやれば、木々の間に月を見ることができ。方向は間違っていないと思うのだけれど。

「ふうん、まあいいか。朝になるまでに辿り着ければ」
前方から、楽観的な声が返ってくる。

自分は朝になるまでに元いた陣屋に帰れるだろうか。すでに惣太

は半ば諦めているのだが、それでもやっぱりため息が漏れてしまった。さて、今回のため息は何回目だろうか。

「ところでさ、あんたの名前は何ていうの？」

しばらく進んだところで、またまた女忍者が話しかけてきた。

忍者はもう少し物静かなものかと思っていたけれど、どうやらそうでもないらしい。

「惣太ですけど」

とりあえず、正直に名前を教えておいた。女忍者は歩いていた足を止め、そしてこちらを振り返った。

「ふむふむ、ちなみに私の名前も教えてほしい？」

「いや、別に……」

「なによお、そこは聞き返すのが礼儀でしょうが」

あんたに礼儀云々を言われたくない。

だがまあ、ここは言われたとおりにしたほうが良さそうだ。機嫌を取っておかないと、何をされるか分からない。

「じゃあ、あなたの名前も教えてくれませんか？」

聞いた方がいいが、思いつきり棒読みである。

しかし、忍者が簡単に名前など明かすものだろうか。明かしているものだろうか。

「私はね、唯っていうの」

簡単に明かしてしまった。

「親しみをこめて、唯ちゃんって呼んでね」

「ゆ、唯ちゃん？」

「って、馴れ馴れしいわ！」

「いてっ！」

平手で頭を叩かれた。わけが分からない。

唯と名乗った女忍者は、叩かれた頭を押さえて困惑する惣太を見ながら、面白そうに笑っている。

まったく、こんなわけの分からない忍者と一緒に大丈夫なのか。

「あのお、唯ちゃ……唯さん？」

「なあに？」

再び歩き出そうとした頃、今度は惣太のほうから声をかけた。

実は、ずっと気になっていたことがあるのだ。

「殿様のいるところまで行くってことでしたけど、何の目的があつて行くんですか？」

自分も同行することになったのだから、なるべくなら危険の少なそうな目的であつてほしい。

まあ、忍者がそんな安全な仕事をするとは思えないし、自分の目的を明かすとも思えないのだが。

「目的？ あれ、言つてなかったっけ？」

「聞いてません」

「ちよつと手紙を届けに行くのよ、竹満頼忠さんに」

「手紙？」

「そう、この手紙よ」

唯は懷に手を入れて、そして四角く折られた紙を取り出した。

あつさりしたものである。惣太は啞然としてしまった。

「わざわざ唯さんみたいな忍者が届けるってことは、やっぱりその手紙は密書なんですか？」

「そりゃそうよ。だからこうして人目を忍んで、殿様本人に会いに行こうとしてるんじゃない」

人目はいちおう忍んでいるが、惣太の目はまったく忍んでいないような気がする。

「ちなみに、その手紙には何が書いてあるんですか？」

この際なので、そこまで聞いてみることにした。

ひよつとしたら、この戦に関する重大な秘事が書かれているかもしれない。それを探りつつて報告すれば、持ち場を無断で抜け出した罪を帳消しにもらえるかもしれない。さらに、上手く利用すれば自分自身の手柄に繋げられるかもしれない。

そんな考えが、惣太の頭にちらりと浮かんだ。

だが、手紙を手に行っている唯はつまらなさそうに首を振る。

「それがさあ、中身までは分からないのよね。殿様本人に手渡すまでは、絶対に、絶対に、絶対に開けちゃ駄目って言われてるのよ」

「はあ、そうですか」

やはり世の中そんなに甘くはないらしい。

「でも、開けるなど言われると開けたくなくなるのが人情ってもんじゃない？ まして三回も念を押されちゃうとね、なおさら気になってくるのよ。どうせ後で適当に誤魔化せばいいんだし、ここで開けちゃおうかしら」

「ええっ！ いや、駄目ですよ！」

手紙は折りたたんだ紙を紐で縛っただけである。その気になれば、誰でも中をのぞけそうだ。

ところが、唯があまりにも簡単に開けようとしてしまったので、ついつい惣太は止めてしまった。頭ではちょっと小ずるいを考えても、性格がそれ以上に真面目で小心なのかもしれない。

「むう、別にイイじゃん。ちょっとくらい」

ぶつくさ言いながらも、唯は手紙を懐にしまう。今になって、もつたいないと思う惣太であった。

ちなみに、手紙を簡単に開かれないよう、糊を使って封をすることを始めたのは、あの石田三成だったとか。

さて、木々の間を縫いつつ進むと、やがてその向こうにぼんやり灯りが見えてきた。

さらに近づいてみると、その灯りが明々と焚かれた松明によるものであること、そして灯りの向こう側には真っ白な幔幕が広がっていることも分かった。

「あそこが殿様のいる場所かしらね」

「はい、多分ですけど」

惣太は自信なさげだが、幔幕には竹満家の家紋が大きく染め抜か

れている。ということは、その幔幕に囲まれた向こう側が、竹満頼忠が陣取っている本陣に違いない。

「どうやら無事に辿り着くことができたらしい。」

「よし、さっさと忍び込んでいきましょう」

「あつ、待つて！」

本陣に向かつてずんずん歩いていこうとする唯の着衣を、後ろから惣太が引つ張った。

ちよつと仰け反った後、彼女の動きが停止する。続いて首をねじると、怪訝そうな顔を惣太に向けてきた。

「なによ、今さら怖気づいたの？」

怖気づいているのは最初からである。

「いや、そうじゃなくて」

ふるふると首を振った惣太は、人差し指を口の前に立てて見せた。唯は首をかしげるのだが、ほどなくして彼女も合点がいったような顔になる。そして二人して身体を低くし、足元の茂みに身を隠した。

やがて見えてきたのは、立派な鎧をまとった騎馬武者を先頭にした数人の集団の姿である。騎馬武者の後ろには、槍を持った足軽たちが続いている。本陣の周りを見回っている一隊だろう。

その一隊が、惣太たちのいる場所と本陣の幔幕の間に通っている細い通路を横切っていく。

「あんた、あいつらが近づいてくることに気付いてたの？」

「ええ、まあ」

一隊の姿が見えてくる前から、カチャカチャと鎧の擦れ合う音や、馬と人の足音が聞こえてきていた。それを聞いて、惣太は誰かが近づいているのではないかと思ったのである。

「へえ、意外と鋭いのね」

惣太のことを見直したかのように唯は言うが、彼女が無用心すぎるだけのようないふ。

「うーん、あれくらいの人数だったら、騒がれる前に始末できるかしら。まずはあの馬の上の侍の喉首を掻き切って……」

本気なのかどうか、唯はそんなことを呟いていた。

だが、それを実行に移す気はなかったようだ。二人して息を潜めていると、騎馬と足輕の一隊は彼らの前を横切ったまま行ってしまった。こちらに気付いた様子もなさそうだ。

「これで堂々と忍び込めるわね。行きましよう」

堂々と忍び込むって、言葉として矛盾しているんじゃないだろうか。

しかし、いちいち指摘している暇などない。

唯は再び立ち上がると、さっそく幔幕の下に潜り込んでしまった。ここまで来たのだから、道案内という自分の役目はもう終わったんじゃないかと思いつつ、なんとなく惣太も後を追うのであった。

第1章 北白矢川陣中異聞（四）

幕を持ち上げ、向こう側へと身体を滑り込ませると、幸いにもそこには誰もいなかった。

ホッとして周囲を見回すと、四方を幔幕で囲まれているこの場所は意外と広い。あちらこちらに置かれた篝火が照らしているこの空間には、三十人や四十人の人間を軽く並べることができるだろう。

端のほうには槍や盾などが立てかけられており、さらに竹満家の家紋を印した旗も並べられている。真ん中あたりには机が置かれており、その周りには床几が並べられていた。

「ここで戦の策でも考えてたのかしらね」

唯が机の上に目を落とした。この周囲の地形を描いた地図が述べられており、あちらこちらに朱色で印が入っている。

なるほど、ここで軍議が開かれていたのは確かなようだ。

（でも、なんで誰もいないんだろう）

ここは本陣、本来ならば総大将たる殿様が居座っている場所である。それなのに、パチパチと篝火の爆ぜる音がするばかりで誰の声も聞こえない。もちろん、誰の姿も見えない。

「留守かしら」

「どうしましょうか」

「仕方ない。ここで殿様が帰ってくるまで待つことにするわ」

そう言つて、唯は手近の床几に腰を下ろしてしまった。

「ちなみに、床几っているのは木と布でできた折りたたみ式の椅子みたいな物のことよ」

「誰に向かって言ってるんですか？」

その床几は縦長の机の一方の端、軍議を行う時には全体を見渡すことができる位置にある。軍議の間では一番偉い者が腰かける場であり、ようするに殿様が座っていたであろう場所だ。

気軽に座ったりして良いのだろうか。

さらに言うなら、こんなところで堂々と待っていても大丈夫なのだろうか。誰かがここに現れて、見慣れない女忍者と足軽がいたら明らかに不審に思うだろう。その場で斬って捨てられても文句は言えない。

「ほら、あんたも座りなよ」

唯が近くの床几を指でさす。

やっぱり何を言っても無駄なんだろうなあと思いつつ、惣太は遠慮がちに腰を下ろした。こちらは特に飾りもない普通の床几だが、きつと偉い人が座っていたのだろうから。

「そういえば、あんたって竹満軍の足軽なんだよね」

腰を落ち着けてさほど時間も経たない頃、唯が惣太に話しかけてきた。

なにを今さらと思ったが、惣太は素直に頷いた。頬杖をつきながら、唯はそんな惣太を眺めている。

「なんで足軽なんてやってんの？ あんた、合戦場に出るには見た目も性格もいかにも頼りなさげじゃない」

大きなお世話だ。

「仕方なかったんですよ。他にやることもなかったんだから」

惣太は自嘲気味に呟いた。

「僕は次男坊だし、家も貧乏だし……」

惣太の両親は百姓をやっている。

しかし、田畑といえば猫の額くらいしか持っていなかった。租税を取られた後に残る稲や野菜では、父と母と二人の子供が食っていくのがやっとの貧乏暮らしだ。

そんな生活でも、子供が小さく必要な食べ物量が少ないいうのなら、いちおう飢えずに生きていられた。だが、やがて子供は大きくなる。食べる物も足りなくなってくる。

さらについ最近、兄が嫁を迎えて家族が一人増えることになって

しまった。

こうなると、次男の惣太の身の置き所がなくなってしまふ。分けてもらえるような田畑はないし、婿養子として別の家に行くような当てもなかった。

惣太は途方に暮れてしまった。

そんなところに親が持ち出してきたのが、竹満家に足軽として奉公に出るという道だったのである。

これならば、手っ取り早く日々の食事と眠れる場所が手に入る。

ちょうど人手を求めていたらしく、足軽を募集するための役人が惣太の村に訪れてきていたのも渡りに船だった。

そんなこんなで、惣太は渡ってきた船に半ば強制的に乗せられたのである。

今回の戦が始まったのは、乗ったその船が漕ぎ出したのと同様の時のことだ。

後から考えれば、大きな戦が始まるからこそ足軽を募っていたという事で、惣太は自分の運のなさを嘆いた。嘆いても、乗りかかった船から降りることはできなかった。

「もつと身分の高い武士の家とか、大きな商家にでも生まれていたら、こんな危ないことをしなくても良かったのに。それに、こんなしょっちゅう戦が起こってるような時代じゃなかったら、もう少し別の場所で働いていたかもしれないし……」

いつの間にもやら、惣太の身の上話は単なる愚痴になっている。どんだん首の角度が下がっていることを、おそらく本人は気付いていない。

「ふうん、まあ気の毒な身の上なんだろうけどさ、下ばかり向いてても何も変わらないんじゃないの？」

そろそろ惣太の話に飽きてきたのか、ここで唯が口を挟んできた。「生まれた場所が悪いっていうのは分かるし、今の世の中も物騒で口クなもんじゃないけどさ、仕方ないものは仕方ないじゃない。生

まれてきた以上は、世の中がどうだろうと自分の腕と頭に頼って食
い扶持を稼いでいくもんじゃないの？ 少なくとも、私はそうやっ
て生きていたいと思うよ」

それだけ言って、唯は氣だるそうにあくびを漏らした。

「……………」

口調もたいして熱意のこもったものではなかったが、というわ
けだろうか、唯の今の言葉は惣太の胸に妙に響いた。

（自分の腕と頭で食い扶持を稼いで生きていく、か……）

どことなく、今の自分よりもずっと自由に楽しい生き方のように
思える。ただ、きつと簡単な生き方ではない。自分にそんな力があ
るのだろうか。

「そういえば、お腹すいちゃったな。何か持ってない？」

せっかく自分自身のことを見つめ直していたのに、唯の声が惣太
を現実に戻した。

顔を上げると、彼女は自分の腹部に左手を当てながら、右手をこ
ちらに出している。

「え？ 何かって？」

「何か食べる物よ。ずっと歩きっぱなしだったから、もうお腹がペ
コペコなの」

自分の食い扶持を自分で稼ぐなんて言っていたくせに、さっそく
人に食べ物をたかっている。

ついさっき自分が言ったことを、早速さっぱり忘れているのだろ
うか。

「まあ、干し飯なら持ってますけど」

呆れてしまったが、惣太は腰の帯に括りつけた袋を取り外した。
この袋の中に、一食ぶんくらいの干し飯が入っているのだ。

ちなみに干し飯とは、この時代の携帯食であり保存食である。米
粒を干して乾燥させたもので、水に浸して柔らかくして食べたり、
あるいはそのまま食べることもできる。

もともとは腰兵糧として戦の前に支給されたものだった。明日の

朝に食べるための物だが、今となつては明日の戦に出られるかどうかも疑わしい。

「ありがと。このお礼は、いつかするからね」

あまり当てにならないなあと思いつつ、惣太は袋を唯の手の上に載せてやった。

そんな時である。

この場を囲う幔幕の一部が、ほんの少しだけ揺れた。ちょうど惣太の正面、唯の向こう側だったので、惣太の目にその動きが映った。風のせいかと気にしなければそれまでなのだが、なぜか惣太は揺れてできた幕の隙間をよく見てしまった。そして、次の瞬間には彼の眼が大きく見開かれた。

「危ない！」

叫ぶやいなや、惣太は唯の肩を押して横に思い切り押し倒していった。その勢いのまま、彼も一緒に地面に倒れ込む。

口の開いた干し飯の袋が、唯の手から放り出された。中に入っている干し飯の粒が、バラバラと飛び散る。

そして、袋も干し飯も空中にあるうちに、一本の矢が惣太たちの頭の上を通り過ぎていった。ちょうど唯の頭があつたあたりを通り抜け、やがて反対側の幔幕に当たると、矢は地面に落ちた。

惣太が幔幕の隙間に見たのは、弓に矢をつがえて構えている人間の姿だったのだ。

その弓から矢が放たれるのと、惣太がとつさに唯の身体を押し倒したのは、ほとんど同時のことである。

「いたた、鼻打っちゃった……」

顔の真ん中を押さえながら、唯が立ち上がる。

「すみません」

謝りながら、惣太も立ち上がる。

唯は別に惣太を責めない。あと少しでも惣太の動きが遅ければ、頭に矢が突き刺さっていたかもしれないことを分かっているからだ。

矢が飛んできた方向に顔を向け、そして幔幕の間から現れた人影を見据えていた。

ゆっくりとした足取りで、立派な甲冑を身にまとった武士が歩いてくる。

「あれが殿様？」

兜まではかぶっていないため、武士の顔つきまでがよく見える。どことなく気品のある顔には厳格そうな皺が幾筋も刻まれており、年齢は四十前後といったところか。

「殿様、じゃないですね」

竹満頼忠は二十歳過ぎだと聞いている。

「じゃあ、誰？」

「さあ……」

やがて、こちらに近付いてきていた武士は、二人との間に十歩ほどの距離を置いて立ち止まった。

惣太と唯を順番に見ているその視線は、突き刺さるかと思うほどに鋭い。

唯はひるむことなく見返していたが、惣太は思わず目をそらしてしまった。身なりからすると相手は相当な身分の武士である。少なくとも、惣太のような足軽が立ったまま対面していいような相手ではない。

「なんだ、お前たちは？　ここで何をしている？」

声音も視線も威圧的だ。

「お前は我が軍の足軽か？　しかし、そっちの娘は妙な身なりをしているな。ただの娘ではないな？」

なるべく相手の顔を見ないように、惣太はずっと俯いている。唯はどうだろうかと隣を窺うと、彼女は特に臆した様子もなく武士と向き合っている。

「まあ、確かに私はただの女の子じゃないですけどね、ここには殿様に用があつて来たんです。そんなことより、いきなり矢を射掛け

てきたことを謝ってもらえます?」

惣太を庇うようにして、唯は一步前に出る。彼女の態度は誰に対しても変化しないのだろうか。

その神経の太さが、今は頼もしく思える惣太である。

「本陣に來たら怪しい者の姿を見かけたのだ。始末しようと思ったところで、咎められることもあるまい」

「始末されるほうにしてみれば、たまったもんじゃないですよ」

「ふん、そんなことよりも、その用とやらは何なのだ?」

「言えません。殿様以外は誰にも内容を言うなど、きつく言われているんです」

不敵な態度を崩さない唯であるが、惣太と話していた時は割と簡単に仕事の中身を喋っていたような気がする。いちいち口を挟んでいいような雰囲気ではないので、心の中に思うだけで留めておくが。そして、武士も横柄な態度を崩すことなく唯に答えた。

「殿は今陣中見回りに出ておられる。しばらくは戻ってこれないから、わしが代わりに聞いておいてやろう」

「手紙は殿様本人に直接渡せって言われているので、あなたに渡すわけにはいきませんね」

なるほど、この本陣が空っぽだったことにはそういう理由があったのか。

それはともかく、唯はすっかり仕事の内容を口走ってしまっている。手紙という言葉を目にして、武士の顔に笑みのようなものが浮かんだ。

「なるほど、ならば無理にも渡してもらうまでのこと」

言うやいなや、武士は腰に帯びた太刀を抜き放つ。

馬上でも使えそうな長大な太刀である。よく砥がれているらしく、篝火の灯を受けてギラギラと光っている。そして、その刃の光よりもさらにギラつく二つの眼が、惣太と唯の面上に向けられた。

これはマズそうだ。あの眼は本気だ。惣太の心の中で、そんな警鐘が鳴っている。

逃げ出したい。いや、驚きと恐怖のせいで腰から下に力が入らないので、この場に腰を下ろしてしまいたい。

しかし一方、自分のすぐ前に立っている唯は、臆する様子もなく武士と相対している。

仮にも、男の自分が先にへこたれるわけにはいかない。なけなしの意地を振り絞って、惣太はどうにか立っていた。

「殿様に宛てた書状を横取りするつもり？ そんなことしていいんですか？」

唯が尋ねる。ゆっくりと太刀を持ち上げながら、武士は唯を見下ろした。

「ふっ、わしが何のために陣幕の陰に身を潜めていたと思う？」

「さあね。惣太は分かる？」

「えっ！ 僕ですか？」

いきなり話を振られて慌てる惣太。

「ええっと……殿様が戻ってくるのを隠れながら待っていて、しかも弓や太刀を持っていたということは、ただ単に用事があって殿様に会いに来たってわけじゃないですよね」

しかも、身分ありげな身なりの割には供も連れずに一人である。

「ひよつとしたら、人に知られないように殿様に近づいて、そこで暗殺してしまおうとした、とか？」

混乱しながらも、惣太は頭に浮かんだ想像を口に出しながら組み立てる。導き出されたのは、あまり的中してほしくない不吉な結論だった。

「よく分かったな。その通りだ」

残念なことに、当たっていたらしい。

「へえ、すごいじゃん、惣太」

ほめられても嬉しくない。

ともかく、この武士は有若家がこちらに指し向けた暗殺者だろうか。

いや、暗殺者がわざわざあんなに立派な鎧を着ることは考えにくいので、竹満家を裏切ってあちらと内通している裏切り者というところだろうか。

よく見ると、武士が着けている立派な具足の胸の部分には、その陣幕に染め抜かれている家紋と同じものが彫り込まれてある。ということは、この武士は竹満家の親族になるのだろうか。

竹満家の一門衆で、年齢は四十くらい。その中で、この戦に従軍している武將といえば……

「ねえ惣太。あんた、あの男が誰なのか知ってるの？」

目の前の武士を見ながら少し首を傾けている惣太を見て、唯が声をかけてきた。

「多分ですけど、竹満義忠様じゃないかと」

思い浮かんだ手がかりに一致して、なおかつ惣太が名前を聞いたことのある竹満家の重臣といえば、その名前くらいしか当てはまらない。

あまり自信はないし、仮に当たっていたとしても本人がそれを認めるかどうか。

「こいつはこう言ってますけど、あなたは本当に竹満義忠様ですか？」

「ふむ、そこまで読むとはいいたものだ。隠し立てしても仕方あるまい。いかにもその通りだ」

唯の問いかけに、武士は自分が竹満義忠だとあっさり認めてしまった。

そして、つと惣太を見やると、面白いものでも見るかのように目を細める。

「その足軽の小僧はなかなか鋭い勘働きをしているな。娘同様、ただの足軽というわけではなさそうだ」

いや、ただの足軽なんですけど。

褒められるだけならともかく、惣太も曲者の同類ということになってしまった。こんなことなら、武士の正体の詮索なんてしなけれ

ばよかった。

「それで、なんで暗殺なんてしようとしてるの？　あなた、それなりに高い身分の武士なんでしょ？」

唯がまたまた問いかける。高い身分の武士に対する言い草とは、とても思えぬ口調なのは相変わらずだ。

「ふつ、強い者に付くことこそ今の世の習いよ。わしはもともと竹満家の一門、殿の命を奪い、今の竹満家を滅ぼすことができれば、有若家の庇護の下にこの地はわしの手に入る」

「有若家と手を組んで、殿様の首を取れば自分が殿様になれるってわけね。そんなふうにはコソコソ動き回っても、人の上に立つ人間にはなれないわよ」

コソコソ動き回ることが仕事の忍者に言われても、説得力がないような気がする。

「さて、そろそろお喋りも終わりにしたいところだが、わしが目的も名前もすべてお前たちに教えてやったのは何故だと思う？」

「それだったら私にも分かるわ。どうせ殺しちゃうから、何を喋っても問題ないってことなんでしょ？」

「ふつ、その通りだ」

呟いたかと思うと、竹満義忠は太刀を両手で握り、そして真上に振り上げた。次の瞬間、義忠の足が大きく前に踏み出されるとともに、唸りを上げながら太刀が振り下ろされる。

いきなりのことに惣太の頭は切り替わらない。

まっすぐ迫ってくる太刀を呆然と眺めるしかなかったのだが、ふいに胸を小突かれたかと思うとそのまゝ背後に倒れてしまった。

尻餅をつく、視界の真ん中を太刀がまっすぐ通り過ぎる。あのまま立ったままでいたら、視界の真ん中ではなく頭の真ん中を太刀が縦に通っていただろう。

危ういところで惣太を突き飛ばしたのは唯であり、そして彼女も先ほどまで立っていた場所にはいない。横に少し移動して、振り下

ろされた太刀から逃れていた。

「いきなり乱暴なことするわね。仕方ない、ちょっと痛い目にあってもらおうかしら」

そう言つて、彼女は懷に持っていた短刀を取り出して、鞘から抜き放った。身体をやや斜めに向け、脚を少し開いて無造作ながらも構えの姿勢をとる。

「ふん、お前のような小娘に何ができる」

唯の様子を鼻で笑うと、竹満義忠は下がっていた太刀を再び持ち上げ、そして猛烈な勢いで横に薙ぎ払った。唯の細い腰など、すっぱり上下に切り離してしまいそんな剛刀である。

しかし、太刀が迫っても唯の表情に変化はなかった。

後ろに下がって身をかわすのではなく、彼女は逆に前に踏み込む。太刀が半ばまで振りきられるより前、唯は竹満義忠の手元にまで入り込んだかと思うと、そのまま相手の身体の横を通り抜けた。

「ぐっ！」

唯が足を止めると、竹満義忠が小さく呻くような声を発した。それと同時に、何も斬らずに空転しただけの太刀がその手から落ちてしまった。

ただ単にすれ違っただけかと思いきや、あの一瞬のうちに唯は竹満義忠の腕に斬りつけていたのだ。太刀を取り落とした義忠は、右の手首のあたりを手甲の上から押さえている。

「ふふん、どんなもんよ」

唯が振り返る。

「だいたいね。そんな長い太刀を持って暗殺に来る時点で間違ってるのよ。なんなら、私が暗殺のやり方について教えてあげましょうか」

そして、得意げな顔を向ける唯であった。

（こんな場合なのに、緊張感がないなあ）

しかし、今この場ではその緩さ加減がホツとする。とりあえず、

この恐ろしい男に殺されることにはならないだろうと惣太は思った。ちなみに、彼は未だに屍餅について地面に座ったままである。自分でも情けないと思うのだが、先ほど刀で斬られそうになった際の驚きと恐怖のせいで、ついに腰から下に力が入らなくなってしまった。

だが、ホツとしたことで余裕ができた。とりあえず立とうとしたら、惣太は視界の先で何かが光ったことに気が付いた。

「あつ！」

と、惣太が声を上げたのと、その何かが彼の視界を通り過ぎていったのはどちらが早かったのやら。通り過ぎたのは、細くて長くて棒のような……矢だった。

次の瞬間には何かが地面に倒れた音が聞こえて、そちらの何かは唯だと分かる。

先ほど義忠が矢を放った際は唯を助けることができた惣太だが、今度はどうしようもなかった。足を折り曲げ、唯は地面にうつ伏せに倒れてしまった。

「くっつ……」

すぐに唯は立ち上がるうとしたのだが、足から力が抜けたように下半身がガクリと崩れ、片膝をつく格好になってしまう。膝をついている右足の衣が破れており、ふくらはぎの部分からは血が出ていた。

唯の足を掠めていったのであろう矢は、彼女からずいぶん離れた場所に転がっている。

（誰がこんなことを）

矢の落ちている場所と反対の方向に目をやると、幔幕の隙間に一人の男が弓を携えて立っているのが見えた。

もちろん矢はあの男が放ったもの。竹満義忠の仲間がそこに隠れていて、そして義忠を助けるために唯を狙ったのだ。

「ふん！」

「あぐっ！」

一方、唯に手を斬られた竹満義忠は、足に怪我を負ってしまった唯のもとに近づいて、そして足を上げて彼女の腹を蹴り上げた。

反撃することも避けることもままならず、ともに蹴りを受けた唯の身体は背後に転がる。何度か転がると、やがて義忠に背を向けたかたちで彼女は止まった。

「まったく、手間をかけさせおつて」

倒れこんで腹を押さえている唯のところ近づきながら、竹満義忠は脇差を抜く。右手で握れるということは、唯が先ほど付けた傷はそれほど深いものではなかったらしい。

完全に状況は逆転してしまった。今は義忠の頬に笑みが浮かんでいる。

「だが、わしが一人でいたと思っていたのは油断であつたな。死ね！」

そして、抜いた脇差を唯の背中に向けて突き立てようとした。

しかし、脇差を持つ手は振り上げられたまま、それが振り下ろされることはなかった。

「わあっ、あああああ！」

絶叫と呼ぶに相応しいような大声が聞こえてきたかと思うと、いきなり竹満義忠に背後から組み付いてきた者があつたからである。腰のあたりに手を回し、乱暴に身体を左右に揺さぶってくる。

危く倒れそうになるのを踏ん張って耐えながら、義忠は首を背後にめぐらせる。自分に組み付いてきた者の顔を見ようとした。

「くそっ、この下郎がっ！」

最初は組み付いた側が義忠の身体を振り回していたのだが、振りほどこうとする義忠の力のほうが強い。組み付いた側は、すでに振り回される立場になっていた。

それでもどうにか組み付いて、必死に離れまいとしているのは惣太だった。

（あら……）

きつく目をつぶって齒を食いしばっている惣太の顔を、しばし唯は呆然と見つめていた。なにやら珍しい生き物を前にしたかのような心持である。

怪我をした足の痛みは変わらないが、彼女は上半身を起こして二人のほうに首を向けていた。

惣太は自分を助けようとしているのだろうか。丸腰で竹満義忠にしがみつくなんて、そんな無茶をするような性格だとは思ってもみなかったが。

しかし、やがてハッと我に返ると、彼女は惣太たちとは別の方向へと目を向ける。つい先ほど、彼女に向けて矢を放ったもう一人の男が、こちらへと駆け寄ってくる様子が見えた。

仲間である竹満義忠と惣太が密着しすぎているために、弓で助けることができないのだらう。弓を捨て、右手に刀を持ちながら駆けてくる。

そんな男に向かって、唯は右手を振って薄い鉄片を飛ばした。四方を鋭く尖らせたその鉄片は、忍者がよく用いる手裏剣である。

実は、足を怪我して倒れた際、義忠が油断して近寄ってきたところに投げつけてやろうと思って手に隠し持っていたのだ。どうにも予想とは違ったことになってしまったようなので、こちらに投げつけることにした。

「ぐっ！」

唯の手から離れた手裏剣は、空を切り裂きながら飛んで行くと、近寄ってくる男の右肩のあたりに突き立った。

もっと真ん中を狙ったのに、狙いを外したことに唯は小さく舌打ちした。

しかし、手裏剣を受けた男のほうは十分に驚いている。急に自分の身体に突き立てられた手裏剣と、そして痛みに顔を歪ませる。走っていた足は止まり、そして手からは刀が落ちた。

男は刺さった手裏剣を抜こうと右肩に手をやるが、そこを唯が鋭くひと睨みしてやる。

その目を見てまた手裏剣を投げつけられると思ったのか、男は横へと走って陣幕の隙間に姿を消してしまった。

ひとまず姿を隠してまた現れるつもりかと思つたが、男はどうかこの場から逃げようとしているらしい。具足の擦れる音が遠ざかつていることがそれを教えてくれており、やがてその音も聞こえなくなつた。

「ええい、離れぬか！」

「うわっ！」

一方、組み合つていたままの竹満義忠と惣太である。惣太も顔を真っ赤にして頑張つていたが、たまりかねた義忠が大きく身体をねじると、その勢いで惣太の身体も大きく揺れた。

しかし、それでも惣太は意地を見せて手を放さない。義忠のほうも大きく動いた惣太の身体に引つ張られてしまったようで、二人は勢いよく地面に倒れこんでしまった。

そして、悪いことに倒れた後は惣太のほうが下になっていた。

右へ左へ振り回されて、倒れた時には頭を打って、しかも重い甲冑を着込んだ男が上から倒れ掛かつてきたのである。すでに惣太の頭はフラフラだった。

「邪魔をしておつて、貴様から先に始末してくれるわ」

上半身だけを起こした義忠は、すぐ下にいる惣太を睨みつける。

その怒りの形相と、さらに右手に握られている脇差を目にするとゾツと恐怖を覚えたが、しかし惣太にはどうすることもできなかった。

馬乗りになられた姿勢のまま、脇差が惣太の首をめがけて降りてくる。

しかし、この時点で竹満義忠は唯のことを忘れていた。

唯は、痛む足を引きずりながら二人の近くまで近づいてきており、そして折り重なった二人の上にさらに覆いかぶさるように飛びかかっていった。

義忠の刀が惣太を貫かんとする一瞬前、飛びかかった唯の持つ短刀がその背中に突き立てられた。

「ぐうつ！」

義忠の顔が苦悶に歪む。

握られていた脇差が手からこぼれ落ち、惣太の顔のすぐ横に転がった。

しばらくの間、義忠は低く呻き声を上げたり歯を強く噛みしめたりして苦しんでいた。

下から見ている惣太の目には、まさにそれは悪鬼の形相に映った。しかし、やがてガクリと首を曲げると表情もすんなり消えた。そのまま身体も動かなくなってしまった。

「ふう〜」

怪我をした足を前に投げ出し、地面の上に腰を下ろした唯は長い息をはく。息と一緒に緊張感も吐き出して、一安心といった感じだ。一方、惣太は死体になってしまった竹満義忠の身体の下から這い出そうとしているところである。

頭は混乱したままだし、体も興奮のせいでガチガチだ。なかなか思うように抜け出せない。

どうにかこうにか這い出すと、そのまま地面に這いつくばってしまった。顔と地面がくっついた。

「いや〜、思わぬ厄介ごとに巻き込まれちゃったわね。まさか殿様を暗殺しようとしてるヤツがここに来るなんてね」

「そ、そうですね」

いちおう惣太も同意しておく。

唯に会った時点ですでに彼は厄介ごと続きなのだが、すでにそんなことは考えられなくなっていた。

とりあえず、自分が死んでないということが分かるだけで十分である。

第1章 北白矢川陣中異聞（五）

「さてと、あとは殿様が帰ってくるのを待って……って、噂をすればなんとやら」

耳の横に手を当てて、唯が何かの音を聞き取る仕草を見せる。

わざわざ耳をすまさなくても、どこからか音が聞こえてきているのは惣太にも分かった。

多くの人が話す声と、金属の鎧が擦れる音。徐々に近づいてくる足音の中には、馬のものも混じっているようだった。

「陣中見回りに出てた殿様が戻ってきたのかしら。やっと用事を済ますことができるわね」

「でも、この人はどうしますか？」

惣太が遠慮がちに指をさしたのは、動かなくなってしまった竹満義忠の身体である。

留守のはずの本陣に忍びがいれば、ただでさえ怪しまれる。そんなところに死体まで一緒に転がっていれば、さらに怪しまれるだろう。

「とりあえず、隠しときましょう。あつちのほうに槍とか盾とか色々並べてあるから、あの下にでも運ぶのよ」

唯が指をさしたのは、陣幕で囲まれたこの場所の隅のほうである。惣太も首を巡らせてみたが、とっさの隠し場所になりそうな場所は他にはなさそうだ。

「隠すっていつでも、誰が？」

「あんたに決まってるじゃん。私は足を怪我してんのよ」

威張って言うようなことではないと思うが、しかし仕方がない。

鎧を着こんだ男の身体は重くて運びづらい。また不意に動き出すんじゃないかと不安になりながらも、惣太は竹満義忠の死体を急いで運んだ。

隅に寝かせた死体の上には盾をかぶせ、そして前には槍を立て並

べて外からは見えないようにしてやる。

「はい、ご苦労さま」

ひと仕事終わって惣太は唯のところに戻ってくる。

軽く労いの言葉をかけてもらったところに、今度は前方のほうから近づいてくる武士の集団が目に入った。

この本陣に戻ってきた竹満頼忠と、それに従う家臣たちだろう。

何人もの男たちが、こちらに向かって歩いてくる。まったく、忙しい。

「む？　なんだ、何者だ、お前たち！？」

やがて、向こうもこちらに気づいたらしい。本陣の真ん中に腰を下ろしている唯と、その横に突っ立っている惣太に目を留めた武士の一人が声を上げた。

大きな声を上げながら、ずかずかと前に出てきたのは、髪も髭も白くなった老武者然とした男である。すでに腰の太刀に手をやっている。

その剣幕に、惣太は思わず後ずさったが、唯は動じる様子もない。足を前に投げ出し座ったままで、右手を挙げて相手を制するようにした。

「まあまあ、くせ者がこんな堂々と姿を見せるわけないでしょう。私はこの手紙を殿さまに届けに來ただけの忍びよ。怪しい者じゃないわ」

忍びとは基本的に怪しい者だとも思うが、それはともかく唯は懐にしまっていた書状を取り出した。

居並ぶ男たちに見せつけるように、前に向かって書状をかざす。

その堂々たる態度が効いたのか、唯のすぐ前に立つ老武者をはじめとして、他の武士たちの動きも止まった。ただし、ほぼ全員が険悪そうな顔を見せているのは変わらない。

一番先頭に立っている老武者の右手は太刀の柄にあてられたままだし、今にも太刀が抜かれて斬りかかってきそうな気配を感じる。

「まあ待て、そう気負わずに落ち着け落ち着け」

そんな張りつめた空気のなか、どこか気の抜けたような声が聞こえてきた。

「相手はたった二人、しかも片方はまだ若い娘ではないか。おまけに、怪我をしておるようだ。怪しい者には違いないが、そこまで身構えるような相手ではあるまい」

老武者の肩を押しつけながら、一人の男が前に出てくる。歳の頃は二十代の半ばかと思われるが、その堂々とした態度は他の者に圧倒感を与えている……ように見える。

「わしが竹満頼忠だ。わざわざ書状を届けに来るとは、苦勞であったな」

やっぱりそうか。この青年が竹満家の当主である頼忠だった。

（こんなふう突つ立つてちゃダメだよなあ……）

そう思った惣太は、今さらながら地面の上に両膝を折つて頭を下げた。

「あなたが竹満頼忠様？ やっぱり偉い人は落ち着いてるわね」

一方の唯は殿様を前にしても緊張の欠片も見せない。

「じゃあ、これを受け取ってください」

実に気軽な調子で、持っていた手紙を竹満頼忠の手に渡した。

「ふうむ……」

唯から手紙を受け取り、それを手の中で広げた竹満頼忠はさっそく中身に目を落とした。

読み進めていくにつれ、その端正な顔が強張っていくようにも見える。同時に、彼の背後に居並んでいる家臣たちも、緊張の度合いを増しているように見えた。

「なるほどな」

やがて読み終わったのか、頼忠は手紙を手の中で折りたたむ。

「平十郎！」

「は？ ははあっ！」

後ろを振り返った頼忠の呼び声に反応したのは、先ほど唯に突っかかっていった老武者である。急に名前を呼ばれて一瞬戸惑ったようだが、すぐに大きく声を上げて頭を下げた。

平十郎ということは、あの老人は山岸平十郎保重だろうか。竹満家においては重臣で、確か家老を務めていたということを惣太は記憶していた。

その山岸平十郎に向かって、頼忠はよく透る声で指示を出した。

「今から全軍を引き連れて城に戻る。そのように下知いたせ」

「ははっ！　って、なんですと？」

勢いよく同意したかと思いきや、すぐに山岸老人は驚いて問い返すような声を出す。顔を上げ、戸惑った顔を頼忠のほうに向けていた。

まあ、無理もないような気もするが。

明日は戦だというのに、敵の軍勢と向かい合って陣地を構えているというのに、この戦は竹満家の浮沈に関わる重要な一戦だというのに、総大将である頼忠はそれをすべて引き払って帰ると言い出したのだ。

惣太も、それを聞いて啞然とする思いである。

「な、なな、なにゆえにございますか？」

山岸老人が、震える声でそう問い返した。すると、頼忠は持っている手紙を老人の顔の前に突きつけた。

「これを見よ。これは父上よりの書状じゃ」

父上ということは、つい先日まで竹満家の当主であり、そして隠居して頼忠に家督を譲った先代当主の延頼のことだろう。唯が持ってきた手紙とは、延頼から息子の頼忠に宛てたものだったらしい。

「この字には見覚えがある。父上が書かれたものに間違いない」

では、その手紙には何が書かれているのだろうか。

「ここにはこう書かれている。我が軍中には敵方に内通しておる者がいるとな」

「なんと！」

山岸老人が驚きの声を上げる。

それと同時に惣太は下げていた頭を上げていた。そして、すぐ隣に腰を下ろしている唯と顔を見合わせる。

「裏切り者がいるのでは、戦を始めたところで我が軍の負けは必至であろう。むざむざと負ける戦をするわけにはいくまい」

「しかし、我が軍に裏切り者がいるとは、確かなことなのですか？」

「父上が以前から使っている忍びより報せがあったそうだ。そのような調べを父上が密かに進めておられたことは、わしも知っておる」
「では、いったい誰が裏切ったのでございまするか？」

「ふむ、それが誰であるのか、しかとは分かつておらぬらしい」

これは困ったというように、頼忠は腕を組んで首を傾げる。

「まったく、父上にも困ったものだ。知らせるなら知らせるで、誰が裏切り者であるか調べ上げてから知らせれば良いようなものを。

これでは余計に話がこじれて……」

なにやら親への愚痴をブツブツ呟き始めた頼忠であるが、ここでふと惣太と唯のほうへと顔を向けた。

「お前たちも忍びの者のようだな。裏切り者について、何か聞いてはおらぬか？」

「え？ まあ、聞いていると言いますか……」

裏切った本人の口から聞いたと言っべきか。

さすがの唯も、どう答えれば良いものと少し迷っているようだったが、続けて何かを言うより前に、隣の惣太にちらりと目配せをした。

直接見せたほうが話が早いんじゃない？ 唯はそんなことを言いたいのだろう。

惣太は立ち上がったて、そして陣幕に囲まれたこの空間の端のほうへと早足で歩いていった。

そこは、先ほど死体を隠した場所である。上にかぶせておいた槍やら盾やらを脇にのけ、惣太は竹満義忠の身体を引きずり出した。

「！」

いきなり死んだ人間の身体が現れたことに、それまで惣太の様子を黙って見ていた男たちがどよめいた。

「義忠様ではないか！」

山岸老人が声を上げる。

苦悶に歪んだ死体の顔が竹満義忠のものであることを理解して、一同はさらにどよめいた。

「忍びの娘よ。これはどういうことかな？」

頼忠もさすがに息をのんだような表情を見せている。その顔のまま唯に問いかけた。

「はい、実はですね……」

唯が先ほどの経緯について説明を始める。

ここに忍び込んで義忠に会ったこと、有若家に通じていることや頼忠の命を狙っていることを本人の口から聞かされたこと、そして殺されかけたので仕方なく返り討ちにしたこと。

この足の傷もその時に負ったもので、それはもう激しい戦いだったと、妙な誇張まで交えながら唯は語った。

そのくせ、惣太もいちおう助勢したことは省かれたりして、彼としては不満が残る。まあ、殿様との話の間に割り込んでいく勇氣など、惣太は持っていなかったのだが。

「なるほど、では書状にあった裏切り者とは義忠のことだったのだな」

唯の話をひととおり聞き終わると、竹満頼忠は動かなくなった義忠を見ながら頷いた。

「この者ならば、有若に誼を通じるようなこともあったかもしれぬな」

頼忠が家督を継ぐ際にも難色を示していたりして、以前から頼忠と義忠の仲はあまり良くなかったらしい。というよりも、義忠のほ

うが年若の頼忠のことを一方的に嫌ったり侮ったりしていたそう。
また、義忠の知行地は有若家の領地と境を接する場所にあり、最近では義忠の屋敷に不審な武士が出入りする様子もあつたとか。

内通するならこの男ではないかと疑つてはいたのだが、しかし確たる証拠もないために手を出さずにいたのだと、頼忠は唯に聞かせているのか独り言のつもりなのか呟いた。

「しかし殿、裏切り者の正体は知れました。これで憂いなく戦に臨むことができますな」

意気込んで言うのは山岸老人である。

驚くようなことが続けばかりで少々萎れて見えていたのが、今はまた肩を怒らせ拳を震わせ、勇ましい老武者の姿を取り戻していた。

戦が始められると思つて元気を出すなど、惣太にはおよそ想像もできない心持である。

「いや、先ほども言つたとおり戦には臨まぬ。今夜のうちに兵をまとめて城に帰るぞ」

「なっ、なんですと!？」

「義忠の率いてきた兵の数は決して少なくはない。しかし、その兵を明日の戦で使うわけにはいくまい。こうなつてしまつては、兵の数で我がほうが不利になる」

またまた驚く山岸老人だけでなく、後ろに従う多くの者に対して頼忠は述べ立てる。

「それに、裏切り者が義忠一人とは限らぬであらう。他にも裏切り者がおつたらどうする? たとえこれ以上の裏切り者はおらぬとしても、一人いれば他にもいるのではないかと疑い出すのは人の情というものだ。そうなつてしまつては、たとえ兵の数で優つていても負けるが必定である」

誰からも反論は出てこない。

まだ若いとはいえ、さすがは殿様だ。いざとなれば、周囲の者に有無を言わせぬ威厳がある。

「では、どうせならば有若の者たちを驚かせてやるとしよう。陣幕も篝火もそのまま置き捨て、人と馬だけをひっそりと移動させる。朝になったら知らぬうちに我らが消えていて、奴らは呆然とするこ
とだろう」

「ははあっ！」

居並ぶ家臣たちが頭を下げる。

では、どこの部隊から引き上げを始めるか。竹満義忠の率いてきた部隊はどうするかなど、細かい打ち合わせも始まった。

「さて、お前たち」

急に本陣が慌しくなってきた。そんな中で竹満頼忠は、騒ぎの外側にいる二人に声をかけてきた。

唯と惣太である。

唯は相変わらず足を投げ出して座ったままで、惣太も彼女の隣に膝を折って座っている。

「助かったぞ。お前たちのおかげで、無駄な戦をせずに済んだようだ」

「どういたしまして。でも、無駄でも無駄じゃなくても、できるだけ戦はしないようにしてくださいね。振り回される庶民は大変なんですから」

「ははは、確かにな。肝に銘じておこう」

殿様相手に恐縮という言葉を知らない唯には驚かされるが、それを軽く受け止める頼忠も度量が大きい。

「ところで……」

頼忠の視線が、唯からその横のほうへと移動する。惣太は、その視線が自分の上にきたことを感じた。

「お前は我が軍の足軽の格好をしているが、お前も忍びなのか？」

「えっ、あ、いや……」

忍びではなく真正正銘の足軽である。

足軽なのだが、ではどうして忍びの女と一緒にこんなところにい

るのかと聞かれたら困る。

最終的な結果はどうあれ、見ず知らずの女忍者を道案内して一緒に本陣に忍び込んだのは立派な軍令違反だ。うかつなことを言ってしまうと、それがもとで処罰されたらどうしよう。

そんなことを思ってしまったて答えが出てこない。

「はい、この男も私の仲間の忍びです。足軽として竹満軍の中に入り込み、今回の内通の件についても密かに探っていたのです」

そこに唯が助け舟を出してくれた。

嘘八百だが、わざわざ否定する言葉も惣太からは出てこなかった。ここは黙って嘘に乗っておこう。

「そうか、それは苦勞であつたな」

頼忠も唯の言うことを不審に思った様子はない。それで納得してくれた……ように見える。

「それじゃあ、私たちはこのあたりで失礼されてもらいます」

「うむ、このたびの働きは忘れはせぬぞ」

用事は済んだので、さつさとこの場から去ることになった。挨拶を交わすと、竹満頼忠は家臣たちの輪のほうへと戻っていった。

さて、自分も唯と一緒に出て行ったほうがいいんだろうなと惣太は思う。立ち上がったのだが、横にいる唯はその場に座ったままだつた。

「惣太、負ぶってくれない？」

こちらを見上げながら唯が言ってくる。

そういえば、彼女は足に怪我をしていたんだつた。

「歩けないほど酷い怪我なんですか？」

足はともかく、口はずいぶん回っていたようだが。

「ええ、それはもう痛くて痛くて涙が出そう。ほら、さつさと負ぶって」

「分かりましたよ」

仕方ない。

惣太は唯の前に背中を向けて屈み込む。彼女は惣太の首に手をまわしながら乗りかかってきた。

なんとも言えない柔らかさを背中に感じて、惣太は顔全体と両の耳まで赤くしてしまう。それはともかく、意外と重い。

「言っとくけどね、意外と重いと思うのは色んな忍び道具を持つてゐるからだからね。鉄でできた手裏剣とか、苦無とか」

そんな言葉を頭の後ろに聞きながら、惣太は本陣を後にするのであった。

第1章 北白矢川陣中異聞（六）

人目を忍びながら山を降り、山から離れる頃にはすでに東の空が白っぽくなっていた。

今ごろは、竹満軍の兵たちも秘かに山から離れていることだろう。戦を前にして鼻息を荒くしていた組頭は、撤退の命令をどんな気持ちで聞いていたのやら。

それにしても、自分はこれからどうしようか。惣太は明けていく空を見ながら途方に暮れた。

昨夜に起きたことはすべて狐に化かされて見た幻で、朝になったら何事もなかったかのように陣屋で目を覚ますのではないかと期待していた。しかし、そんな期待は空しく消えてしまったようである。今さら竹満軍の中に戻って行つて、昨日までと同じように足軽として働かせてくれと言うのも無理だろう。きっと組頭には、自分が戦を前に逃げ出したと思われている。

「ねえ、あんたはこれからどうするの？」

そんな惣太の思いを読み取ったのかどうか、いまだに彼の背中に乗ったままの唯が聞いてきた。

（これからどうするか、どこに行けばいいのか）

惣太は答えられない。

両親と兄のいる家に帰れば、とりあえず自分を置いてくれるだろうか。しかし、すぐに追い出されるんじゃないだろうか。

どこに行つたとしても、あまり明るい展望は見えてこない。何をやったとしても、うまくいくような気がしない。悪い想像ばかりが頭の中に渦巻いて、頭がどんどん下を向いていく。

まあ、あれだけ嫌がついていた戦に出なくて済んだのだ。それだけでも良かったと考えるべきなのかもしれない。

「とりあえずさ、私たちの里に来ない？」

「里？」

再びの唯の言葉に、惣太はゆっくりと頭を上げる。

「そう、ここから東のほうに二里くらい行った山の中にあるの。これから私はそこに帰って、昨夜のことを報告しなきゃいけないのよ」
「まあ、唯さんが足を怪我して歩けないって言うんなら、そこまで送って行きますけど」

これも乗りかかった船だ。

「ありがと。でね……」

「あっ！」

惣太が足を止めた。

突然のことだったので、背中の唯は少し体勢を崩してしまった。

「どうしたのよ！？ 急に立ち止まらないでよね」

そんな唯の抗議には答えず、惣太は前をじっと見たままだ。

唯も惣太の頭の横から前を見える。道の真ん中に、誰かが一人立っていた。朝の陽が、その人物の足元に長い影を作っている。

「誰？」

「誰でしょうか」

甲冑を身につけ、抜き身の刀を右手に提げている。その身なりからすると、今回の竹満家と有若家の戦に参加していた武士の一人のようだが、なぜこんな場所に一人でいるのか。

そして、明らかにここを通る惣太と唯に用があって立っているように見える。

「ふふふ、まさかこんなところで会えるとは思わなかった。だが、会えて嬉しいぞ」

ゆっくりと歩み寄って来ながら、武士はそんなことを言っている。どうやら相手はこちらのことを知っている様子だが、はてどこで会ったのやら。

惣太は首をかしげ、目を細めながら相手の姿を眺めてみるが、どの誰だか分らない。そうしていると、耳のすぐ近くから声が聞こえてきた。

「あれ？ あの人、ひよつとしたら……」

「唯さん、知ってる人ですか？」

「あんたも会ってるはずよ。ほら、あの義忠つて人と一緒にいた人」
そう言われても、惣太はあまりピンとこない。

義忠と一緒にいた人ということは、物陰に隠れながら唯に向かつて矢を射って、そして唯の手裏剣を受けて逃走した男のことだろう。しかし、惣太はその男のことはほとんど一瞬しか見ていない。顔も覚えていなかった。

「あの、なにかご用ですか？」

惣太の肩越しに、唯が向こうの武士に尋ねる。

「たいした用などない。だが、お前たちの姿を見つけたのでな、これは斬って捨てておかねばならぬと思ったまですよ」

またまた物騒な言葉が出てきて惣太の背筋が凍る。いい加減に慣れたかと思ったが、やっぱり慣れることはないらしい。

「ご主人様の仇討ち？ それとも、私たちへの逆恨み？ いや、単なる憂さ晴らしかしらね。あなたが仕えてた人はもういないわけだし、明日から辛い牢人暮らしが待ってるもんね」

「なんとでも言うがよい」

再び武士が歩き出す。それと同時に、右手の刀に左手が添えられた。

「仕方ないわね。惣太、私を下ろして」

「あ、はい」

惣太が屈むと、唯はよっこらしよと言いながら彼の背中から地面に降りた。その場に方足を投げ出す格好で腰を下ろす。

「じゃ、あとはよろしく」

「は？」

「は、じゃないわよ。このとおり私は怪我をしてるんだし、あんたがあいつの相手をするの。ほら、これ貸してあげるから」

唯が取りだしたのは彼女が持っている短刀である。

これである男と戦えと言っているのだらう。ようやく惣太にも理

解できてきた。

「いや、無理。無理ですよ」

れっきとした武士を相手に、しかも刀を手にした者を相手に、今まで口々に喧嘩もしたことがない惣太が向かっていっても斬り殺されるのがオチである。

「無理でも何でも、あんた以外に誰もいないじゃない。大丈夫、死んだ気になってかかっていけば、最低でも相討ちには持ちこめるわよ」

「相討ちって……」

そうなれば唯は生き残れるだろうが、惣太にしてみれば最低最悪な結果である。

「いい？ 余計なこと考えちゃダメよ。この刀を握って、あいつの身体に突き刺すことだけ考えて、全速力で突っ込んでいきなさい」

「うう……分かりました」

惣太は唯の短刀を手にとった。鞘を払う手は震えている。

「ちょうどいいわ。これで勝てたら合格ってことにしておこうかしら」

唯がそんなことを呟いていたのだが、惣太の耳には届いていなかった。

「そんなわけで、こいつが相手をしますから」

刀を構えている武士に向かって、惣太の後ろから唯が言う。

「せっかくなんで、あなたの名前を教えてもらえますか？」

「竹満義忠が一の郎党、伊勢山重左衛門」

震えている惣太の様子にすでに勝ちを確信したのか、名乗る声には自信が溢れている。そのまま刀が大きく上段に持ち上げられた。
(こうなったら、腹を括るしかないか)

短刀の柄を両手で握り、脇に抱えるようにしてそれを構える。

ゆっくりと地面を擦るような足運びで、惣太は伊勢山重左衛門と名乗った武士との距離を詰める。

やがて動きを止めた位置は、ひとつ飛びで相手の懷に飛び込んでいけるであろうギリギリの場所である。

対する伊勢山はジリジリと横へ移動していたかと思うと、こちらもひとつの場所で足を止めた。惣太を正面に見据え、そしてその真後ろには唯がいる。また唯に手裏剣を投げられることを警戒しての位置取りだろう。

「どうした？ 震えているぞ」

惣太の持つ短刀の切っ先は確かに震えている。伊勢山がそれを押揃えるような声を投げてきた。

しかし、惣太は答えない。

ただ眼前のみを見据え、そこに立つ男の腹の部分だけに視線を当てている。この手に持った短刀を、どうしてそこに突き立てるのかのを考えていた。

剣の技量なら相手のほうが明らかに上なのだ。小細工を弄したところで仕方がないと惣太は思っていた。

そして、地面を思い切り蹴る。自分自身が矢になったつもりで、伊勢山重左衛門の懷めがけて飛び込んでいく。

対する伊勢山は、惣太が向かってくると見るやいなや肩を動かし刀を振り下ろした。白刃が、惣太の脳天めがけて襲い掛かる。

しかし、白刃が惣太の頭を割ることはなかった。

彼の頭の高さにまで刀が振り下ろされるより先に、惣太は伊勢山重左衛門の腕の下にまで踏み込んでいた。身体をぶつけるのと同時に、短刀を相手の腹に突き刺していた。

伊勢山の腕は半ばまで振り下ろされたところで止まっている。完全に振り切るより先に、惣太の刀が胸に届いていたのだ。

伊勢山は、刀を振り下ろそうとしたその瞬間、腕の付け根に激痛が走るのを覚えていた。そこは、竹満軍の本陣において唯の手裏剣が打ち込まれた場所であった。それほど深い傷ではないと思っていたのに、まさかこの時になって痛み出すとは運が悪い。

「ぐう……」

搾り出すような呻き声が伊勢山の口から漏れる。そして、その手から刀が落ちた。

一方、惣太はしばらく相手の懷に密着したまま、刺さった刀を通して肉の感触を手に感じていた。やがて、どうやら自分は生きているらしいと確信すると、グツと力を入れて刀を引き抜いた。その反動で、後ろに倒れて尻餅をついてしまった。

そして、苦悶に顔を歪めた伊勢山重左衛門も、ゆっくりと地面に崩れていった。

（戦場においては頭で考えることを捨て、命も捨ててきたと思え。なにも考えるな。ただ目に映った敵にのみ向かえ。そのまま突き進め）

目の前に倒れている男の身体を見つめながら、惣太の頭にはそんな言葉が浮かんでいた。

先ほど唯が言っていた言葉に似ているが、頭に響くのは彼女の声ではない。

この言葉を聞いたのは昨日のことだった。自分の組下の足輕を前にしながら、足輕組頭が言っていた言葉なのだ。

まさか、こんなところでその言葉を思い出すことになるとは思っていなかった。

「惣太！」

唯が呼んでいる。

彼女のところに駆け寄りたところだが、腰は抜けているし足はガクガク震えているしで立つこともできない。情けないが、四つん這いになって近づいていった。

「ご苦労さま。頑張ったじゃない」

「それは、どうも」

どうやら褒めてもらえたようだが、嬉しさもあまり感じられない。それくらい疲れてしまっていた。

「で、さっきの話の続きなんだけど、私たちの里に来ない？」

「え？ ああ、はい。ちゃんと送っていきますよ」

ただし、しばらく休んでからにしてほしい。

「で、そのまま私たちの里に住んで、そこで修行してみない？」

「は？ 修行？ 修行って、何のために？」

「忍者になるための修行よ。あんた、忍者になりなさい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5943z/>

あんた、忍者になりなさい

2011年12月19日22時52分発行